

有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形の意味的対応について

-無情物のヲ格名詞の例を中心に-*

趙南弼*

〈 要 旨 〉

本論文では、無情物のヲ格名詞における有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形との意味的な対応を考察した。例えば、「気分を(晴らす/晴れさせる)」や「玉を(転がす/転がらせる)」などの動詞句における意味的な対応である。

事態の「特定成立と特定生起」、また「結果成立と結果生起」によって、並存する有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形とが分けられることを述べた。「特定成立」とは「特定の時期に特定の動作・作用を起こす」、「特定生起」とは「特定の時期に特定の動作・作用を生じさせる」、「結果成立」とは「無かった状態から動作・作用の結果を起こす」、「結果生起」とは「無かった状態から動作・作用の結果を生じさせる」、ことである。考察の結果、有対他動詞ス形は事態の「特定成立と結果成立」として特徴付けられること、有対自動詞(サ)セル形は「特定生起と結果生起」として特徴付けられることを述べた。

具体的に、「気分を晴らす」は、無かった状態の動作・作用の結果を起こす「結果成立」を表すと考えることができる。「気分を晴れさせる」は、無かった状態の動作・作用の結果を生じさせる「結果生起」を表すと考えることができる。「気分を(晴らし/?晴れさせ)ていく」や「太郎の気分を(??晴らし/晴れさせ)た」で確かめられた。一方、「玉を転がす」は、特定の時期に特定の動作・作用を起こす「特定成立」を表すと考えることができる。「玉を転がらせる」は、特定の時期に特定の動作・作用を生じさせる「特定生起」を表すと考えることができる。「玉を(転がし/*転がらせ)がちだ」や「30分かけて玉を(転がし/転がらせ)た」で確かめられた。

本論文では、無情物のヲ格名詞における有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形において、「特定成立と特定生起」、また「結果成立と結果生起」という意味的な対応を提示した。

論文分野：文法

キーワード：有対自動詞、有対他動詞、他動性、使役性、動詞使役形

1. はじめに

本論文は有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形との意味的な対応について、無情物のヲ格名詞の例を中心に考察するものである。

「有対他動詞ス形」というのは、他動詞に接尾辞「ス」がついたもののうち、対応する自動詞をもつものである。

* This work was supported by the National Research Foundation of Korea Grant funded by the Korean Government [NRF-2011-35C-A00648].

** 培花女子大学校、非常勤講師、日本語学

- (1) Ⅰ. 気分が晴れる(自動詞) Ⅱ. 気分を晴らす(他動詞ス形)

「有対自動詞(サ)セル形」というのは、自動詞に接尾辞「(サ)セル」がついたもののうち、対応する他動詞をもつものである。

- (2) Ⅰ. 気分が晴れる(自動詞) Ⅱ. 気分を晴れさせる(自動詞サセル形)

本論文では、現代日本語において、例文(1Ⅱ)と例文(2Ⅱ)のように、他動詞ス形¹⁾と自動詞²⁾の(サ)セル形における意味的な対応について考察する。

両形の比較において、有情物のヲ格名詞を取る場合、例文(3Ⅱ)のように自動詞(サ)セル形は他者への使役を表す。他動詞ス形は通常、使役の意味を持たないので、例文(3Ⅱ)と例文(3Ⅰ)との意味差は著しい。しかし、無情物のヲ格名詞の場合、例文(4Ⅱ)と例文(4Ⅰ)との区別がやさしくない。

- (3) Ⅰ. 太郎が転がる Ⅱ. 太郎を転がらせる Ⅲ. 太郎を転がす
(4) Ⅰ. 玉が転がる Ⅱ. 玉を転がらせる Ⅲ. 玉を転がす

例文(4Ⅱ)の場合、使役主は有情物でも無情物でもありうる。例えば、「太郎が玉を転がらせた」、「地震の揺れが玉を転がらせた」が例になる。したがって、例文(4Ⅱ)と例文(4Ⅰ)の場合、無情物を対象にするヲ格名詞の動詞句が、並存する例がある。例えば、「地震の揺れが玉を転がらせた」と「地震の揺れが玉を転がした」の例で、意味的な対応を明らかにする必要がある。

本論文では、例文(4Ⅱ)と例文(4Ⅰ)のように、有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形とが並存する用例において、意味的にどのような対応をなしているのかをのべる³⁾。従来の研究では、自動詞(サ)セル形に対するヲ格名詞の意味関係をのべている。ところが、自動詞(サ)セル形の不自然な「*体を負けさせる」の動詞句でも、「体を暑さに負けさせないように鍛える(日本語基本動詞用法辞典)」のように、補語が加わることによって、自動詞(サ)セル形が可能になる。したがって、他動詞ス形と自動詞(サ)セル形の並存の可否は、個別的な叙述になる傾向があった。

1) 参考資料の北原(2003)では、「夜が明ける」と対に成っている「夜を明かす」のようなス形動詞を他動詞とし、現代日本語において、対を持つ「有対動詞ス形」を他動詞として規定している。本論文では北原(2003)の規定を支持する立場である。加えて、「歌う、読む」などの無対動詞に対して、ス形の「歌わす、読ます」とセル形の「歌わせる、読ませる」などは、使役形の異形であると考えられる。北原(2003)でも、「歌う、読む」類の無対動詞に対する「歌わす、読ます」類の動詞形は他動詞として挙げていない。第3節で詳細を述べる。

2) 自動詞の定義について、本論文では、北原(2003)に従い、「ヲ格に対応してガ格を取る動詞(「割れる/割る等」)、ヲ格名詞への働きかけが認めにくい動詞(「道を歩く等」)、対象への働きかけはあるがヲ格にならないニ格を取る動詞(「人にかみつく等」)、同族目的語としてヲ格だけを取る動詞(「マラソンを走る等」)を自動詞とする。

3) 早津(1989)に倣って、形態/意味/構文論的な面から、有対動詞と無対動詞を区別する。ところが、語根が異なる有対動詞は対象外にする。なぜなら、異形の語根の動詞類も有対動詞として認めると、自他の構文/意味関係で対になっている「死ぬ、殺す」類なども有対動詞になるからである。

本論文では、事態の「成立」⁴⁾と「生起」⁵⁾とをもちいて、並存する有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形との意味的な対応を比較する。

「成立」とは事態の成り立ちが出来上がることで、考察のために「特定成立」と「結果成立」とに分ける。具体的に、特定成立とは「特定の時期に特定の動作・作用を起こす」、また結果成立とは「無かった状態から動作・作用の結果を起こす」こととして定義する。

「生起」とは事態の現れ起こりが生じることで、「特定生起」と「結果生起」とに分ける。特定生起とは「特定の時期に特定の動作・作用を生じさせる」、また結果生起とは「無かった状態から動作・作用の結果を生じさせる」こととして定義する。

本論文での考察を通して、無情物のヲ格名詞に対する有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形との意味的な対応を提示する。

2. 先行研究と問題のありか

従来の研究では、無情物のヲ格名詞を対象にする自動詞(サ)セル形の動詞句について、例えば「(冷蔵庫で)ゼリーを固まらせる」の例を次のようにのべている。井上(1976)は「自発性を持つ対象格」で説いている。そして、青木(1977)は「対象物の能力・本性」の利用で説明した。早津(2004)は「物の状態変化の惹起」を表しているとのべている。

詳細に、井上(1976)では、「太郎が風船を膨らませる」の例をあげ、ヲ格の無生名詞句は自発性を表すとのべた。そして、無生物主語は自発の原因を表すとのべた。例えば、「異常気温が野菜を腐らせる」の例である。井上(1976)は、動詞の意味内容に対するヲ格名詞の自発性を指摘した。

青木(1977)では、「ゼリーを冷蔵庫に入れて固まらせる」の例をあげ、そのものの本性を利用してそれを助成する意になるとのべた。「ゼリーを固める」は、そのものの持つ本性・能力などは全く無視し、対象を処理することを表すとのべた。一方、「*ひき肉を固まらせる」の例をあげ、全くその動作を起こす能力を持たないものの場合には、「セル」型表現は不可能であるとのべた。青木(1977)は、動詞の意味内容に対して、ヲ格名詞の本性・能力の現われを指摘した⁶⁾。

一方、早津(2004)では、「ブランデーをふりかけたバナナを冷蔵庫で凍らせる」の例をあげ、積極的な働きかけを行って状態変化を惹き起こしたり、消極的に物や事の状態変化を放置したりする“他動的”な使役についてのべている。また、「子供たちは先生の読んでくれる童話を目を輝かせて聞いている」

4) 日本語動詞の研究における「成立」という用語は、仁田(2002)に言及がある。「〈相対的テンス〉とは、主節で述べられた事態の成立時を基準時として、それとの時間的先後関係を表したものである」とのべている。本論文では、ヲ格名詞と有対他動詞ス形の動詞句に対して、「成立」という意味解釈の可否について述べた。

5) 言語学の動詞の研究における「生起」という用語は、丸田(1998)に言及がある。「同延使役を表す destroy, devastate, kill では、結果出来事(BECOME [y IN-RUINS/DRSOLATE/NOT-ALIVE])は使役出来事に完全に依存して生起し、結果出来事に自立性はみられない」とのべた。本論文では、ヲ格名詞と有対自動詞(サ)セル形の動詞句に対して、「生起」という意味解釈の可否について述べた。

6) 使役とは、他者に対してある動作を行うようにしむけること、他動詞(の特性)は、その作用がある客体に及ぶ意味を持つとのべた。そして、他動性動詞には使役の意をもつものと持たないものがあるとも述べている。

の例をあげ、物や事が人の身体部位・部分である自動詞使役は、文が表現する主たる事態における付帯的な状況を表現しているとのべている。まとめとして、自動詞使役形の意味内容について、ヲ格名詞の〈状態変化の惹起や放置、付帯的な状況の現われ〉を指摘している。

それでは、無情物のヲ格名詞を対象にする他動詞ス形の動詞句について、従来の研究を見よう。

青木(1977)では、意志的に成立する自動詞から作られた「ス」型動詞(「走らす、通わす」等)は使役で、意志的には成立せぬ自動詞から作られた「ス」型動詞(「腐らす、透かす」等)は他動詞だとのべている。

早津(2004)では、「V-(s)aseru/-(s)asu」を使役動詞と規定したうえで、「帰す、通す」などを人の意志動作の惹起を表現する使役動詞、「脅かす、寝かす」などを人の無意志動作(心理的・生理的变化)の惹起を表現する使役動詞、「こわす、回す」などを物や事の状態変化の惹起を表現する使役動詞だとのべた。そして、人や事物に働きかけたりはするが動作や変化を惹起しない表現には他動詞だけが用いられるとのべた⁷⁾。また、早津(1989)では、有対他動詞は結果の状態に注目する動詞が多いものとのべている。

先行研究を参考にして、本論文では、青木(1977)に倣って、「有対他動詞ス形」のほか、物や事の状態変化の惹起を表す「使役的な有対他動詞ス形」を設ける。また、早津(2004)に倣って、「使役の有対自動詞(サ)セル形」のほか、状態変化の引き起しや放置を表す「他動的使役の有対自動詞(サ)セル形」を設ける。それで、有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形との意味的な対応を明らかにしたい。

最近の研究としては、高見(2007)が挙げられる。高見(2007)では、他動詞形と自動詞の使役形に関して次のように述べている。

被使役主が、自らVする力をもっていて、その力である事象が引き起こされる場合は、自動詞使役形が用いられる。一方、被使役主が、自らVする力をもっていない、当該の文で、被使役主がその力を使わないで生じた事象が表されている場合は、他動詞形が用いられる。また、被使役主が、自らVする力をもたない場合にも、他動詞形が用いられる。

高見(2007)に敷衍すると、ヲ格名詞が自らVする力を持っていて、使役主が間接的に影響を及ぼす場合には自動詞(サ)セル形を用いる。例えば、「野菜を腐らせる」の例である。ヲ格名詞が力を使わないで、また力を持っていない、使役主が直接的に影響を及ぼす場合には他動詞を用いる。例えば、「野菜を腐らす、マネキンを{立てる/*立たせる/*立たす}」の例である。高見(2007)は、動詞の意味内容に対して、ヲ格名詞の自らの作用・変化を引き起こす能力の現われを指摘した⁸⁾。

RH&L(1998)では、動詞の使役の意味関係を提示している。まず、L&RH(1995)で説いている「自動詞と他動詞との意味関係」について述べる。例えば、「The window broke.」の例の場合、「Noncausative break:

7) 早津(2004)では、「V-(s)aseru/-(s)asu」の両者の違いを統語的にも意味的にも、一般的なものとして見いだすのはむずかしいという見解をものべている。ただ、書き言葉と話し言葉によって使用の頻度が違うとのべた。会話文の場合、テ形では「V-(s)asu」が比較的あらわれて、否定形では「V-(s)aseru」は少ない傾向があるとのべている。

8) 高見(2007)では、自動詞が対応する他動詞をもたない場合の使役形について、次のような仮説を提示している。「『さす』使役形と『させる』使役形の違い：自動詞が対応する他動詞をもたない場合、『さす』使役形は、使役主が自らの力で被使役主に直接的に関与し、ある作用、変化を引き起こすことを表わす(傾向が強い)のに対し、『させる』使役形は、使役主が被使役主に間接的に関与し、被使役主が自らの意志や力である作用、変化を引き起こすことを表わす(傾向が強い)。」

[_V BECOME BROKEN]]」のような意味関係として説明している。そして、「Pat broke the window./The window broke.」の例を挙げて、他動詞と自動詞の意味関係を説いた。「*Intransitive break* : [[_x DO-SOMETHING] CAUSE [_V BECOME BROKEN]]」と「*Transitive break* : [[_x DO-SOMETHING] CAUSE [_V BECOME BROKEN]]」とがL&RH(1995)で論じているLSR(lexical semantic representation)である。他動詞の場合、*x*が項構造(Argument structure)を持つ反面、自動詞の場合は項構造を持たないという違いがある。

では、使役の意味関係はどうであろうか。RH&L(1998)では、「Sam coughed himself into a haemorrhage. / They yelled themselves hoarse.」などを再帰的結果構文と呼んで、使役の意味関係を認めている。そして、[_x ACT] CAUSE [_V BECOME [_y <STATE>]]として、LSRを表している。

それでは、使役主が無情物の場合の意味関係を見よう。L&RH(1995)では、break, open, meltなどの動詞は、意志的な動作主だけでなく、自然力(natural force)なども主語にとることができる述べている。例えば、「The earthquake broke the window. / The wind opened the door. / The sun melted the ice.」などの例で、使役出来事(causing event)の性質が完全に未指定の場合であるとした。「The window broke. / The door opened. / The ice melted.」のように、使役他動詞が自動詞化をうける場合のみであると述べている。これに対しては、丸田(1998)で、自然力の主語ではない「The impact crushed the car completely. / The car crushed completely.」のような例外をも提示している。

要するに、使役主が無情物の場合、[_x ACT] CAUSE [_V BECOME [_y <STATE>]]の使役の意味関係は、[_x ACT]が「自然力、外的要因、内的要因(日本語の場合、「(風邪で)鼻を詰まらせる」など)」であって、「CAUSE」が表すところは、「特定生起と結果生起」で特徴づけられると言ってもよいと考える。

例えば、特定生起は、「The earthquake broke the window. / The wind opened the door. / The impact crushed the car completely.」の例のように、「特定の時期に特定の動作・作用を生じさせる」ことを表す。そして、結果生起は、「The sun melted the ice.」の例のように、「無かった状態から動作・作用の結果を生じさせる」ことを表す。

3節では、本論文で考察対象にした有対動詞類と無情物のヲ格名詞について述べる。

3. 考察対象と研究方法

本論文では、語根を共にする、いわゆる有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形を考察対象にする。基本的な動詞を対象にして、無情物のヲ格名詞と結合している事例を調べた。

事例の収集は、文字検索ソフトDevasを使った。そして、近現代小説及びシナリオを合わせた2900編のテキストと朝日新聞(週刊アエラ)データベース(1985~2009)、Googleブックスの例文を検索対象にした。考察資料の動詞のうち、「有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形」の並存している例を抽出した。検索方法は、「他動詞語幹ス/シ形(漢字・ひらがな)、有対自動詞語幹(サ)セ形(漢字・ひらがな)」で検索をおこなった。動詞の可能形と複合語は対象外にした。

以下に、考察対象の動詞を自動詞と他動詞の順にわけた。そして、有対自動詞(サ)セル形と有対他動詞ス形とに、並存して結合している、無情物のヲ格名詞を記した。なお、₁の付いている動詞類は無情物のヲ格名詞と結合していて並存する(サ)セル形の不在、₂の付いている動詞類は無情物のヲ格名詞と

結合していて並存するス形の不在する動詞である。改めておきたいが、ヲ格名詞が付いていないからといって、また、**ㇿ**や**#**が付いているからといって、無情物のヲ格名詞の結合しないことを表すわけではない。検索資料から並存している用例が見付からなかったことを記しただけである⁹⁾。

なお、対を持つ「す型他動詞」について、北原(2003)では、「「夜を明かす」のように、「～を」への働き掛けは希薄でも、「夜が明ける」のような対を持つものは、他動詞とする。」のように規定している。本論文では、対を持つ「他動詞ス形」について、北原(2003)の規定を支持する。したがって、対をなしている有対他動詞ス形は「他動詞」として扱う。北原(2003)でも、以下のリストの中の「有対他動詞ス形」を「他動詞」として挙げている。

【有対自動詞と有対他動詞(-su)】

い-きる、い-かす (生)時代 等	くさ-る、くさ-らす (腐)気 等
うご-く、うご-かす (動)目 等	くず-れる、くず-す (崩)心 等
うつ-る、うつ-す (移)火 等	くだ-る、くだ-す (下) ㇿ
うつ-る、うつ-す (映)面影 等	くつがえ-る、くつがえ-す(覆)決定 等
うつ-る、うつ-す (写) ㇿ	けが-れる、けが-す (汚)精神 等
うるお-う、うるお-す (潤)喉 等	こ-える、こ-す (越)国境
おく-れる、おく-らす (遅)発覚 等	こ-える、こ-やす (肥)土 等
おこ-る、おこ-す (起)革命 等	こ-げる、こ-がす (焦)地面 等
おこ-る、おこ-す (興)農業 等	こ-りる、こ-らす (懲) ㇿ
お-ちる、お-とす (落)実 等	こ-る、こ-らす (凝)工夫 等
おどろ-く、おどろ-かす (驚)目 等	ころが-る、ころが-す (転)ビー玉 等
およ-ぶ、およ-ぼす (及)思い 等	こわ-れる、こわ-す (壊)山 等
お-りる、お-ろす (降)階段 等	さ-さる、さ-す (刺) ㇿ
お-りる、お-ろす (下) ㇿ	さ-める、さ-ます (覚)酔い 等
かえ-る、かえ-す (帰)車 等	さ-める、さ-ます (冷)熱 等
かえ-る、かえ-す (返) ㇿ	しめ-る、しめ-す (湿) ㇿ
かく-れる、かく-す (隠)体 等	す-ぎる、す-ごす (過)適齡期 等
か-れる、か-らす (枯)水 等	す-ける、す-かす (透)中身 等
かわ-く、かわ-かす (乾)土 等	す-む、す-ます (済)食事 等
かわ-く、かわ-かす (渴)のど 等	す-む、す-ます (澄)心 等
そ-る、そ-らす (反)体 等	は-える、は-やす (生)毛 等

9) 趙(2007,2008)では、有対自動詞(サ)セル形と有対他動詞とが並存する場合の意味用法について考察した。例えば「血液を{固まらせる/固める}」の場合、「試験管の中で血液を固まらせる」の有対自動詞(サ)セル形は「血液」の潜在的に備わっている実現能力性(固まる)の状態変化の惹起を表す。次に「息を{詰まらせる/詰める}」の場合、「息をつまらせる」は動作主の無情物に対する仕向けが結局は自分に帰結することによって、事態が完結する経験を表す。次に「針金を{曲がらせる/曲げる}」の場合、「針金をまがらせる」は対格名詞の本性の損壊をひきおこすことを表す。有対自動詞(サ)セル形と有対他動詞とは、間接的な仕向けという意味差がある。有対自動詞(サ)セル形と有対他動詞とが並存する例について、「状態変化の惹起・経験・損壊」の意味用法を提示した。

た-える、た-やす (絶)花 等
 たお-れる、たお-す (倒)身体 等
 た-る(た-りる)、た-す (足)衣食 等
 た-れる、た-らす (垂)花 等
 ちぢ-れる、ちぢ-らす (縮)髪 等
 ち-らかる、ち-らかす (散)り
 ち-る、ち-らす (散)火花 等
 つか-れる、つか-らす (疲)心 等
 つ-きる、つ-くす (尽)命 等
 つぶ-れる つぶ-す (潰)り
 て-る、て-らす (照)光 等
 とお-る、とお-す (通)水 等
 と-ける、と-かす (解)り
 と-ける、と-かす (溶)警戒心 等
 と-ぶ、と-ばす (飛)水分 等
 なお-る、なお-す (直)り
 なお-る、なお-す (治)ノイローゼ 等
 なが-れる、なが-す (流)血 等
 な-る、な-す (成)実 等
 な-る、な-らす (鳴)鐘 等
 な-れる、な-らす (慣)体 等
 に-げる、に-がす (逃)り
 に-ご-る、に-ご-す (濁)水 等
 ぬ-ける、ぬ-かす (抜)力 等
 ね-る、ね-かす (寝)り
 のが-れる、のが-す (逃)り
 のこ-る、のこ-す (残)料理 等
 の-びる、の-ばす (延)り
 の-びる、の-ばす (伸)芽 等
 のぼ-る、のぼ-す (上)り

はが-れる はが-す (剥)り
 はげ-む、はげ-ます (励)り
 ば-ける、ば-かす (化)り
 はず-れる、はず-す (外)シュート 等
 は-てる、は-たす (果)り
 はな-れる、はな-す (離)心 等
 はな-れる、はな-す (放)り
 は-れる、は-らす (晴)気分 等
 ひ-える、ひ-やす (冷)消費 等
 ひた-る、ひた-す (浸)足 等
 ひるがえ-る、ひるがえ-す (翻)カ-ト 等
 ふ-える、ふ-やす (殖)量 等
 ふ-える、ふ-やす (増)毛 等
 ふ-ける、ふ-かす (更)夜 等
 ふ-す、ふ-せる (伏)り
 へ-る、へ-らす (減)体重 等
 ほろ-びる、ほろ-ぼす (滅)国 等
 まぎ-れる、まぎ-らす/らわす (紛)声 等
 ま-ける、ま-かす (負)り
 まわ-る、まわ-す (回)風車 等
 みだ-れる、みだ-す (乱)足並み 等
 み-ちる、み-たす (満)海水 等
 む-れる、む-らす (蒸)皮膚 等
 も-える、も-やす (燃)心 等
 もど-る、もど-す (戻)車 等
 も-れる、も-らす (漏)油 等
 やど-る、やど-す (宿)生命 等
 よご-れる、よご-す (汚)り
 わ-く、わ-かす (沸)水 等
 わた-る、わた-す (渡)海 等

検索できた用例を用いて、4節で、有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形とを比較する。有対自動詞の用例における事態が、有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形とで、どのような意味差を表すのかを事例を通してのべる。

有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形の動詞句の検証においては、なるべく事例の有無を判定することによって妥当性を失わないようにした。また検証上、例文の前に?、?、*とあるものは、??は不自然な文、?は許容度にゆれのある文、*は非文的で逸脱性をもつ文、という意味である。なお、本論文でのテストフレームは、影山(1996)、澤田(2008)、森山(1988)などの先行研究の中で、言語現象の検証の方法として行われているテストを参考にしている。

4. 有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形の意味的対応

4.1 有対他動詞ス形と「他動的」使役の有対自動詞(サ)セル形

有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形とが無情物を対象に並存しているものの中、有対自動詞(サ)セル形が他動的な使役を表す用例がある。4.1節に挙げる有対他動詞ス形が、「特定の時期に特定の動作・作用をおこす」という「特定成立」を表すことをのべる。一方、有対自動詞(サ)セル形は、「特定の時期に特定の動作・作用を生じさせる」という「特定生起」を表すこと、また行為・作用の他動的使役を表すことについてのべる。

(5) はず-れる、はず-す (外)

- イ. 来てくれた方々の顔を見ているとシーズンを通して応援して下さった方々ばかり。「僕があの試合でシュートを外したのがいけなかった」(朝日新聞2008年12月10日)
- ロ. シュートを打たれる場面でも、体を寄せることを徹底し、わずかでもシュートを外れさせた。(朝日新聞2007年01月10日)
- ハ. 身長205センチの竹内(3年、洛南高)が突き進んでいく。試合開始直後、相手シュートが外れた瞬間だ。(朝日新聞2005年12月19日)

(6) ころが-る、ころが-す (転)

- イ. 誰が持ってきたものか、一つのビー玉を転がし、その運動を四人の目が追いかけている。(森博嗣『四季』)
- ロ. ビー玉を転がらせた。(日本語基本動詞用法辞典)
- ハ. 「手を動かして、ビー玉が坂道をころころと転がるだけのものをやる。子どもたちは関心を持ってくれる」(朝日新聞2010年01月03日)

(7) ほろ-びる、ほろ-ぼす (滅)

- イ. その逆に、「国が乱れていて、国の王への不満が乱れとんでいるような国を滅ぼすのは簡単だ」ともあります。(斎藤福寿『こけの一念 - 法華経に封印された秘数』)
- ロ. 「援助を拒否して国を滅びさせるか、条件をのむか、道は2つしかない。答えは明らかだ」(朝日新聞1990年01月20日)
- ハ. その彼にとって、形としての国が滅びることは、相対的な問題でしかなかった。(塩野七生『コンスタンティノーブルの陥落』)

(8) まわ-る、まわ-す (回)

- イ. 自分の息で風車を回し、ゾウが空まで飛び上がる。(朝日新聞2004年07月30日)
- ロ. 風で風車を回らせる。(日本語基本動詞用法辞典)
- ハ. 大阪市鶴見区の花博記念公園鶴見緑地では、オランダ風車が回る丘一面の六百六十平方メートルで、九月半ばごろからコスモスが満開となるはずだった。(朝日新聞1999年10月02日)

例文(5d)は「シュートが外れるように仕向ける」、例文(6d)は「ビー玉が転がるように仕向ける」、例文(7d)は「国が減びるように仕向ける」、例文(8d)は「風で風車の翼が回るように仕向ける」、ことについて、特定の時期に特定の動作・作用が現れ起こる例である。

たとえば、例文(5)の場合、例文(5i)と例文(5d)とは、「シュートが外れる」ことが起るという意味解釈で似通っている。しかし、「特定成立」と「特定生起」という意味特徴によって、様相が異なる。例文(5i)では、特定の時期に特定の動作・作用を働きかけて、「シュートが外れるコトヲオコス」ことが成り立つ「特定成立」をあらわしていると考えることができる。例文(5d)は、特定の時期に特定の動作・作用を仕向けて「(相手に)シュートが外れるコトヲ生ジサセル」ことが現れ起こる「特定生起」をあらわしていると考えることができる。

有対他動詞ス形が事態の成立に関わっていることは、「～シガチダ」¹⁰⁾の表現が自然であることから確かめられる。例えば、「シュートを{外し/外れさせ}がちだ」。「～シガチダ」は、動作や状態の傾向を表す。ところが、「*シュートを外れさせガチダ」の場合、「(相手に)シュートが外れるコトヲ生ジサセル」ことが現れ起こる「特定生起」の傾向という不自然な表現になる。一方、「シュートを外シガチダ」は、「シュートが外れるコトヲオコス」ことが成り立つ「特定成立」の傾向という自然な表現になっている。「～シガチダ」を用いて、有対他動詞ス形が事態の成立に関わっていることが確かめられた。

さらに、有対自動詞(サ)セル形が事態の特定生起に関わっていることは、「30分かけて」との結合が自然であることから確かめられる。例えば、「30分かけてシュートを{??外し/外れさせ}た」。「30分かけて」は、経過時間内の動作・状態と経過時間後の結果状態とをあらわす¹¹⁾。「30分かけてシュートを外れさせた」は、シュートが入る事態の特定生起の抑制をあらわす。有対他動詞ス形は事態の「成立」を表すので、「??30分かけて、シュートを外した」は不自然な表現である¹²⁾。

有対自動詞(サ)セル形が「生起」をあらわすのは、ヲ格名詞とあいまって、〈自発の原因や理由、本性や能力・利用、状態変化の惹起や放置〉による「事態の動作・作用を生じさせる事柄を表す」ためだと言ってもよいと考える。

4.2節では、使役的な有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形を比較する。

-
- 10) 森山(1988)では、「～シガチダ」の形式は意思的な主体はもちろん、自発的に起こる動きであれば共起することができ、「冬は道路が凍りがちだ」のような自然現象でも言えるとのべた。
- 11) 影山(1996)では、継続時間副詞は状態変化が完了するのにかかる時間ではなく、その変化が終わった後の結果状態が続いている時間(「電気が30分間消えた」)を表すとのべた。「30分かけて」は、経過時間内の動作・状態と完了後の結果状態とを表すと考えることができる。「30分かけて本を読んだ」は、「30分間本を読んだ」という経過時間内の動作や状態を表す。一方、「30分かけて学校に着いた」は、「学校に着くまで30分かかった」という経過時間後の結果状態をあらわす。
- 12) 例文(6)と例文(7)の場合、有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形とが経過時間と共起できると考える。例えば、例文(6i)の場合、「30分かけて玉を転がす」は、「30分間玉が転がることをおこす」という経過時間内の動作・作用をあらわす。一方、例文(6d)の場合、「30分かけて玉を転がらせる」も経過時間内の動作や状態をもあらわせる場合がある。しかし、「(玉を転がすことができなかった状態からやっと)30分かけて玉を転がらせた」のように、「30分かけて玉が転がることを生じさせた」という経過時間後の結果状態をもあらわすことができる。言わば、特定の時期に特定の動作・作用を仕向ける事態の「特定生起」を表すと言える。

4.2 「使役的」な有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形

有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形とが、無情物を対象に並存している用例の中、有対他動詞ス形が使役的な事柄の成立を表す用例(「毛を生やす、体を隠す」など)がある。村木(1991)では、「他動性の欠如」する再帰動詞についてのべている。例えば、「あびる、着る、履く、すくめる、かしげる」などの他動詞で、自分向けの行動を表す。再帰動詞は、対応する受身文が成立しないことから他動性が欠けている他動詞だとのべている。

4.2節に挙げる有対他動詞ス形には他動性が欠けていると言える。使役的な有対他動詞ス形が、無かった状態から動作・作用の結果をおこす「結果成立」を表すことをのべる。そして、使役の有対自動詞(サ)セル形は、無かった状態から動作・作用の結果を生じさせる「結果生起」を表すことをのべる。

4.2.1 主体の身体や所有物を取る有対自動詞(サ)セル形

(9) は-える、は-やす (生)

- イ. なろう事なら顔まで毛を生やして、こっちのあばたも内済にしたいくらいなところだから、ただで生える毛を銭を出して刈り込ませて、私は頭蓋骨の上まで天然痘にやられましたよと吹聴する必要はあるまい。(夏目漱石『吾輩は猫である』)
- ロ. 幹細胞を頭皮から取り出して培養、再び頭に戻して毛を生えさせることを目標に、研究を進める。(朝日新聞1998年11月23日)
- ハ. 竹ひごのような硬い毛が生えている尻尾は、象を仕留めた者のみが所有出来るのだった。(山崎豊子『沈まぬ太陽』)

(10) たお-れる、たお-す (倒)

- イ. 打山は咆哮すると、身体を倒すようにして突いて来た。(黒岩重吾『白鳥の王子 ヤマトタケル』)
- ロ. 斬首のさい〈首の皮一枚を残して斬る〉とよくいわれるのは、押え役のいないばあい、そうすることで前にぶらさがった首が錘となって身体を前へ倒れさせるからで、これは幕末の吟味方与力・佐久間長敬が『江戸町奉行事蹟問答』のなかではっきりと述べている。(綱淵謙錠『斬』)
- ハ. しばらく森の中を進んだところで……、再び才人の身体はぱったりと倒れた。(ヤマグチノボル『ゼロの使い魔7』)

(11) ひるがえ-る、ひるがえ-す (翻)

- イ. 突風がプリーツスカートを翻す。(池上永一『シャングリ・ラ(上)』)
- ロ. そう言うと、空色のスカートを翻らせて、一目散に学校の方角に駆けて行った。(今邑彩『赤いべべ着せよ…』)
- ハ. 明るい曲調にのって子どもたちの色彩豊かな円形スカートがひるがえり、舞台に華を添えていた。(朝日新聞2007年10月09日)

(12) かく-れる、かく-す (隠)

- イ. 足許の床にズックのキャンヴァスが落ちているところを見ると、先ほどはそのキャンヴァスを

かぶって体を隠していたのかも知れない。(大薮春彦『蘇える金狼』)

- ロ. フリッツよりひと回り小さい体を隠れさせていた征人が、コルト・ガバメントの銃口を持ち上げつつ土谷と正対する。(福井晴敏『終戦のローレライ(下)』)
- ハ. 舞台セットで体が隠れていても、劇の世界にのめり込んだ子どもには、少しの気のゆるみも伝わる。(朝日新聞2007年12月25日)

例文(9イ)は「毛が生えるように働きかける」、例文(10イ)は「身体が倒れるように働きかける」、例文(11イ)は「スカートが翻るように働きかける」、例文(12イ)は「体が隠れるように働きかける」、ことが成り立つ例である。

例文(9)の場合、例文(9イ)と例文(9ロ)とは、「毛が生える」ことが起るという意味解釈で似通っている。しかし、主体(身体)にある物事ができる・生じるという「結果生起」の意味特徴によって、様相が異なる。例文(9ロ)は、無かった状態から動作・作用の結果を生じさせて、「毛が生えるコトヲ生ジサセル」ことが現れ起こっている。例文(9イ)は、無かった状態から動作・作用の結果を起こして、「毛が生えるコトヲオコス」ことが成り立った「結果成立」をあらわす。ところが、自分向けの事態なので、他に及ぶという他動性が欠けている。4.2.1節に属する有対他動詞ス形は使役的な他動詞だと言ってもよいと考える。

有対他動詞ス形が事態の成立に関わっていることは、「徐々に～テイク」の表現が自然であることから確かめられる。例えば、「徐々に毛を{生やし/?生えさせ}ていく」。「徐々に～テイク」は、動作や状態における成立の起動を表す。「毛を生やす」は、事態の「結果成立」を表すので、自然な表現である。

一方、有対自動詞(サ)セル形が事態の生起に関わっていることは、「他人の所有物」の表現が自然であることから確かめられる。例えば、「太郎の毛を{??生やし/生えさせ}た」。「生やす」は、自分の髪や毛を生えるがままに任せることを表す。ところが、「??太郎の毛を生やした」は、他人向けの事態の「結果成立」を表すので、不自然な表現である。

4.2.2 知覚や感情を表す有対自動詞(サ)セル形

(13) つか-れる、つか-らす (疲)

- イ. 僕は人の前に出る毎に、この反対衝動の発作が恐ろしく、その心配と制止観念とで、休む間もなく心を疲れらし、気を張りきつて居らねばならぬ。(萩原朔太郎『僕の孤独癖について』)
- ロ. ケイ子にそう云われてみて、財前は自分の心を疲れさせている一つの原因は、野坂教授の推す相手を気にしているからだと思ったが、「大丈夫さ、ここまで来れば、どんな手段に訴えてでも教授の椅子を奪る、何といっても、教授は二百分の一の率だからな」(山崎豊子『白い巨塔1』)
- ハ. 「多くのことが次々と起こって、心が疲れたのでしょうか。週に二日は何とか生活できても、あとの五日はどうにも気が湧かない。泣いてばかりいました」(週刊アエラ2000年06月12日)

(14) と-ける、と-かす (溶)

- イ. うまく敦子の警戒心を溶かすことができた。(阿部牧郎『不倫の戦士たち』)
- ロ. フレンドリーな雰囲気、警戒心を溶けさせ、心を開かせるのだろう。(朝日新聞2004年08月22日)
- ハ. 警戒心がすこしずつ溶けてゆく気配である。(阿部牧郎『不倫の戦士たち』)

(15) はな-れる、はな-す (離)

- イ. そして於継が朽木の倒れるような斃れ方をしたときも、彼の心を瞬間も加恵から離すことはなかった。(有吉佐和子『華岡青洲の妻』)
- ロ. おせんがある医者のところへ嫁いだという噂は、何か重荷でも卸したように、大塚さんの心を離れさせた。(島崎藤村『刺繍』)
- ハ. 続いて、鏡と綱、そして毘の心が離れた時には、彼女は只泣いているだけだった。(ろくごまるに『封仙娘娘追宝録6 憎みきれない好敵手』)

例文(13イ)は「心がつかれるように働きかける」、例文(14イ)は「警戒心がとけるように働きかける」、例文(15イ)は「心をはなれるように働きかける」、ことが成り立つ例である。

例文(13)の場合、例文(13イ)と例文(13ロ)とは、「心がつかれる」ことが起るという意味解釈で似通っている。しかし、知覚や感情の発生する「結果生起」という意味特徴によって、様相が異なる。例文(13ロ)は、無かった状態から思いもよらない動作・作用の結果として、「心がつかれるコトヲ生ジサセル」ことが現れ起こっている。例文(13イ)は、無かった状態から動作・作用の結果として、「心がつかれるコトヲオコス」ことが成り立った「結果成立」をあらわす。ところで、自分向けの事態なので、他動性が欠けている。使役的な他動詞だと考えることができる。

有対他動詞ス形が事態の成立に関わっていることは、例文(13イ)のように、「休む間もなく」の表現が自然であることから確かめられる。例えば、「休む間もなく心を{疲らし/??疲れさせ}た」。「間もなく」は、動作や状態の継続を表す。ところが、有対自動詞(サ)セル形は事態の発生という「生起」を表すので、「??休む間もなく心を疲れさせた」は、逸脱性のある不自然な表現である。

4.2.3 自然発生を表す有対自動詞(サ)セル形

(16) こ-える、こ-やす (肥)

- イ. 化学肥料を抑え、米ぬか、油かすなどを混ぜて完熟を早めたい肥で土を肥やす。(朝日新聞1990年10月03日)
- ロ. わらを早く腐らせ、土を肥えさせるのだという。(朝日新聞1993年10月30日)
- ハ. 「土が肥えているのでございましょう。花がひときわ色鮮やかに咲きます」(皆川博子『乱世玉響 -蓮如と女たち-』)

(17) か-れる、か-らす (枯)

- イ. 除草剤を使って木を枯らしてしまった経験から、雑草むしりはすべて手作業だ。(週刊アエラ2004年06月21日)
- ロ. 四月から五月にかけてこの幼虫が羽化して枝に穴を開け、木を枯れさせてしまうことを突き止めた。(朝日新聞2000年05月27日)
- ハ. 窓から見ると、川は泥みたいによどんで、その中に草や木が枯れたり繁ったりしていました。(竹山道雄『ビルマの竖琴』)

例文(16イ)は「土がこえるように働きかける」、例文(17イ)は「木がかれるように働きかける」、ことが成り立つ例である。

例文(16)の場合、例文(16イ)と例文(16ロ)とは、「土がこえる」ことが起る意味解釈で似通っている。しかし、原因や自然発生による「結果生起」の意味特徴によって、様相が異なると言える。例文(16ロ)は、「(わらを腐らせることが原因で)土がこえるコトヲ生ジサセル」ことが現れ起こっている。例文(16イ)は、無かった状態から(ヒトリデニ動作・作用の結果として)、「土がこえるコトヲオコス」という「結果成立」をあらわす。一方、例文(17イ)は、無かった状態から(ヒトリデニ動作・作用の結果として)、「(除草剤が原因で)木がかれるコトヲオコス」という「結果成立」をあらわす。間接的な原因や自然発生の事態なので、使役的な他動詞だといえる。

有対他動詞ス形が事態の成立に関わっていることは、「～テクル」¹³⁾の表現が自然であることから確かめられる。例えば、「土を {肥やし/??肥えさせ} てくる」。「～テクル」は、動作や状態の結果状態の持続を表す。ところが、有対自動詞(サ)セル形は事態の「生起」を表すので、「生起」の「結果状態の持続」という「??土を肥えさせてくる」は不自然な表現である。

4.2.4 自然現象を表す有対自動詞(サ)セル形

(18) ふ-ける、ふ-かす (更)

- イ. あの目の血走っているのも、事によったら酒と色とに夜を更かした為めではなくて、深い物思に夜を穩に眠ることの出来なかった為めではあるまいか。(森鷗外『百物語』)
- ロ. その端々、隅々から赤や、青や、茶色の焰がポーッと燃え上るたんびにそこいら中が明るくなって、又、前にも増した暗黒を作って行く物すごい光景を、薄板工場の中から湧き起るケタタマシイ雑音の交錯が伴奏しつつ、星だらけの霜の夜を更けさせて行く。(夢野久作『オンチ』)
- ハ. 夜が更けるとまた雨が降った。(片山恭一『世界の中で、愛をさげぶ』)

例文(18イ)と例文(18ロ)とは、夜が深まるという自然現象の「結果生起」という意味特徴によって異なる。例文(18イ)は「夜更かしをする」ことが成り立つ例で、「夜ふかしする」という主体の行為の「結果成立」をあらわす。影山(1996)では、「*夜が更かされる」の例をあげ、「受身」にならなくて、発生母体となっているとのべた。他動的ではない有対他動詞ス形が自然現象のたとえとして、主体の行為の「結果成立」を表している。例文(18ロ)は、夜が深まる自然現象の状態を「夜を深まらせる」という「結果生起」にたとえて言う表現である。

有対自動詞(サ)セル形が事態の生起に関わっていることは、「命令」の表現が不自然であることから確かめられる。例えば、「夜を {更かせ/*更けさせろ}」。「命令」は、動作や状態の実行を表す。ところが、自然現象の生起をあらわす「*夜を更けさせろ」は不自然な表現である。

www.kci.go.kr

13) 「～テクル」の完了形「～テキタ」の場合を見よう。澤田(2008)では、「～テキタ」は現在完了を表すと説いている。「土を {肥やし/肥えさせ} てきた」の例の場合は、現在完了をあらわす自然な表現だと言える。

4.3 有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形他動詞

有対自動詞に(サ)セル形の接尾辞が付いて、使役形を表すのが通常である。ところが、セル形が付いて他動詞に定着した動詞類がある。有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形とが無情物を対象に並存している例を比較する。

(19) す-む、す-ます (済) 他動詞：すませる

- イ. 他の人にかまわず、迅速に自分一人の食事を済ましてしまう。(北杜夫『楡家の人びと』)
- ロ. 食事を済ませると、ムティソが後片付けをし、恩地はテントに入った。(山崎豊子『沈まぬ太陽1』)
- ハ. 食事が済むと、場所を居間に移してコーヒーをのんだ。(江国香織『東京タワー』)

(20) と-ぶ、と-ばす (飛) 他動詞：とばせる

- イ. 工場で弁当の容器と中身が分けられ、中身は熱で水分を飛ばして発酵させ、およそ1日かけて肥料原料にする。(週刊アエラ2005年05月25日)
- ロ. 従業員は「北風で余分な水分を飛ばせる。これから寒さが厳しくなるのでうまくなりますよ」と話した。(朝日新聞2010年01月23日)
- ハ. 鍋の雑炊は、すでに、水分が飛んで、焦げ始めていた。(秋元康『着信アリ』)

例文(19イ)と例文(19ロ)とは「食事が済むコトヲオコス」という意味解釈で似通っている。「食事を{済ませ/すませる}」のような命令形においても、他動詞ス形と自動詞(サ)セル形との意味差はほぼない。例文(20イ)と例文(20ロ)も、手段を利用して「水分が飛ぶコトヲ仕掛ケル」という意味解釈で似通っている。

例文(19)の場合、有対自動詞(サ)セル形と有対他動詞ス形とが同じく、事態の成立に関わっていることは、「～テオク」の表現が可能なことから確かめられる。例えば、「食事を{済まし/済ませ}ておいた」。「～テオク」は結果状態の持続を表す。有対自動詞(サ)セル形が他動詞として定着したので、両方とも物事が成り立っている事態に相違はない。

また、4.3節に属する有対自動詞(サ)セル形が事態の成立に関わっていることは、「～テシマウ」の表現が可能なことからも確かめられる。例えば、「食事を{済まし/済ませ}てしまう」。有対自動詞(サ)セル形が他動詞として定着したので、両方ともに、「～テシマウ」という完了形をとって、事態の成立をあらわす。

有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形とが無情物を対象に並存しているものの中、有対自動詞(サ)セル形が他動詞になった動詞類にはほかに、「驚かせる、腐らせる、反らせる、沸かせる」などがある。両方の詳細な意味差や話者の使用意図などは今後の課題にしたい。

5. おわりに

本論文では、無情物のヲ格名詞における有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形との意味的な対応を考察した。有対他動詞ス形は事態の「特定成立と結果成立」として特徴付けられること、有対自動詞(サ)

セル形は「特定生起と結果生起」として特徴付けられると言ってもよいと考える。

つまり、他動詞ス形は「特定の時期に特定の動作・作用を起こす(「シュートを外す」)」という特定成立をあらわす。使役的な他動詞ス形は、「無かった状態から動作・作用の結果を起こす(「毛を生やす」)」という結果成立をあらわす。一方、他動的使役(サ)セル形は「特定の時期に特定の動作・作用を生じさせる(「シュートを外れさせる」)」という特定生起をあらわす。使役(サ)セル形は「無かった状態から動作・作用の結果を生じさせる(「毛を生えさせる」)」という結果生起をあらわすと考えることができる。

4節の考察結果は、次のように、「他者(物事)N3が他者N2にN1がVi」で、纏めることができる。

- 有対他動詞ス形(特定成立)と「他動的」使役の有対自動詞(サ)セル形(特定生起)

・「(N3がN2に)N1がViコトヲオコス」(特定成立)

: 特定の時期に特定の動作・作用を働きかける

〈物事が成り立つ、いくつかの要素(目的・手段等)が組み合わさって出来上がる〉

・「(N3がN2に)N1がViコトヲ生ジサセル」(特定生起)

: 特定の時期に特定の動作・作用を仕向ける

- 「使役的」な有対他動詞ス形(結果成立)と有対自動詞(サ)セル形(結果生起)

・「(N3がN2に)N1がViコトヲオコス」(結果成立)

: 無かった状態から動作・作用の結果を働きかける

・「(N3がN2に)N1がViコトヲ生ジサセル」(結果生起)

〈物事(現象)が現れ起こる、また、原因・理由で新しく物事が発生する〉

: 無かった状態の動作・作用の結果を仕向ける

: 通常ならざる事態・現象が発生する

: 主体(身体)にある物事ができる・生じる

: 自然発生、自然現象が発生する

: 新しく物事(知覚,知識,感情,能力など)が発生させる

以上の結果から、例文(10)「気分を晴らす」と例文(20)「気分を晴れさせる」を比較する。「気分を晴らす」は、無かった状態の動作・作用の結果を起こす「結果成立」を表すと言える。「気分を晴れさせる」は、無かった状態の動作・作用の結果を生じさせる「結果生起」を表すと言える。「気分を(晴らし/晴れさせ) ていく」や「太郎の気分を(??晴らし/晴れさせ) た」で確かめられた。

一方、例文(30)「玉を転がす」と例文(30)「玉を転がらせる」を比較する。「玉を転がす」は、特定の時期に特定の動作・作用を起こす「特定成立」を表すと言える。「玉を転がらせる」は、特定の時期に特定の動作・作用を生じさせる「特定生起」を表すと言える。「玉を(転がし/*転がらせ) がちだ」や「30分かけて玉を(??転がし/転がらせ) た」で確かめられた。

本論文では、無情物のヲ格名詞を対象にする有対他動詞ス形と有対自動詞(サ)セル形に関して、先行研究では指摘されていなかった「特定成立と特定生起」、また「結果成立と結果生起」という意味的な対応を指摘した。

今後の課題として、有対自動詞(サ)セル形の「表現性・形象性・比喩性」を調べて、有対他動詞ス形と

の意味差を深めたい。また、影山(1996)では、「-as/os-」の各々の動詞に対して、主語の性質が異なることを述べている。「-as/os-」他動詞は、「{子供が/日照りが} 花を枯らした」、「{父親が/電話のベルが} 子供を起こした」のように、主語は個体(意図的な動作主)だけではなくて、出来事や行為を表すような名詞でもよいとする。今後、動詞の形態と意味の関連を調べたい。

【参考文献】

- 青木伶子(1977)「使役-自動詞・他動詞との関わりにおいて-」『成蹊国文』(須賀一好・早津恵美子(1995)『日本語研究資料集 動詞の自他』ひつじ書房、に再録)
- 井上和子(1976)『変形文法と日本語(上)』大修館書店
- 影山太郎(1996)『動詞意味論 -言語と認知の接点-』くろしお出版
- 澤田淳(2008)「『変化形』アスペクトの『テクル』『テイク』と時間性」『日本語の研究』4巻4号
- 高見健一(2007)「使役系と自/他動詞形」(久野暉・牧野成一・スーザン・G・ストラウス編『言語学の諸相』くろしお出版、に所収)
- 趙南弼(2007)「使役動詞と他動詞の交替について」『日本語学会2007年度秋季大会予稿集』
- 趙南弼(2008)「使役動詞と有/無対他動詞との交替」『岡大國文論稿』第36号 (『日本語学論説資料』第45巻、に採録)
- 仁田義雄(2002)「日本語の文法カテゴリー」(飛田良文・佐藤武義編『現代日本語講座5』明治書院、に所収)
- 早津恵美子(1989)「有対他動詞と無対他動詞の違いについて-意味的な特徴を中心に-」『言語研究』95号
- 早津恵美子(2004)「使役表現」(尾上圭介編『朝倉日本語講座6 文法II』2004 朝倉書店、に所収)
- 丸田忠雄(1998)「使役動詞のアナトミー:語彙的使役動詞の語彙概念構造」東京:松柏社
- 村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- Levin, Beth & Rappaport Hovav, M(1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Rappaport Hovav, M & Levin, Beth(1998) "Building Verb Meanings." In M. Butt/W. Geuder(eds.) *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*. Stanford: CSLI Publications.

【参考資料】

- 内閣告示『常用漢字表』財務省印刷局 2001
- 北原保雄編『面鏡』小学館 2003
- 小泉保編『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店 1989
- 松村明編『大辞林』第二版 三省堂 1995

〈 요 지 〉

有対他動詞ス形과 有対自動詞(サ)セル形の 意味的 対応에 대해서

-無情物 ヲ格名詞의 例를 中心으로-

本論文에서는, 無情物の ヲ格名詞에 대한 有対他動詞ス形과 有対自動詞(サ)セル形の 意味 対応을 考察하였다. 예를들면, 「氣分を(晴らす/晴れさせる)」나 「玉を(転がす/転がらせる)」 등의 動詞句에 대한 意味 対応이다.

事態의 「特定成立과特定生起」, 그리고 「結果成立과結果生起」에 의해, 並存하는 有対他動詞ス形과 有対自動詞(サ)セル形은 나누어 질 수 있다. 「特定成立」이란 「特定の時期に特定の動作・作用を起こす」、 「特定生起」이란 「特定の時期に特定の動作・作用を生じさせる」、 「結果成立」이란 「無かった状態から動作・作用の結果を起こす」、 「結果生起」이란 「無かった状態から動作・作用の結果を生じさせる」、 것이다. 有対他動詞ス形은 事態의 「特定成立과結果成立」으로 特徴지어지며, 有対自動詞(サ)セル形은 「特定生起과結果生起」로 特徴지어질 수 있다.

구체적으로, 「氣分を晴らす」는, 「無かった状態の動作・作用の結果を起こす結果成立」을 나타낸다고 할 수 있다. 「氣分を晴れさせる」는 「無かった状態の動作・作用の結果を生じさせる結果生起」을 나타낸다고 할 수 있다. 「氣分を(晴らし/?晴れさせ)ていく」나 「太郎の氣分を(??晴らし/晴れさせ)た」 등으로 확인할 수 있다. 한편, 「玉を転がす」는 「特定の時期に特定の動作・作用を起こす特定成立」을 나타낸다고 할 수 있다. 「玉を転がらせる」는 「特定の時期に特定の動作・作用を生じさせる特定生起」을 나타낸다고 할 수 있다. 「玉を(転がし/*転がらせ)がちだ」나 「30分かけて玉を(?転がし/転がらせ)た」 등으로 확인할 수 있다.

本論文에서는, 無情物の ヲ格名詞에 대한 有対他動詞ス形과 有対自動詞(サ)セル形에 대해서, 「特定成立과特定生起」, 그리고 「結果成立과結果生起」라는 意味的인 対応을 提示하였다.

논문분야 : 문법

키 워 드 : 유대자동사, 유대타동사, 타동성, 사역성, 동사의 사역형

■ 조남필 (趙南弼)

배화여자대학교 외래강사

piccology@gmail.com

- 投 稿 日 : 2012년 9월 20일
- 審査開始 : 2012년 10월 19일
- 審査完了 : 2012년 11월 19일
- 掲載確定 : 2012년 11월 21일